

「第23回毎日大学フォーラム」(毎日新聞社主催)が10月6日、福岡市博多区のホテルセントラライザ博多で開かれた。すべての授業を英語で行い、全学生に1年間の海外留学を課すなど、先進的な教育で知られる国際教養大(秋田市)の中嶋嶺雄学長が「グローバル化と日本の大学」と題して講演。文部科学省の板東久美子・高等教育局長は「大学改革の推進は社会の変革のエンジンとしての大学づくり」と題して、文科省が進める大学改革について説明した。フォーラムには九州・山口の13大学の学長らが参加し、活発な意見交換が行われた。

# 「国際教養」で「知の鎖国」脱却

「グローバル化」という言葉を意味していますから、言葉は、第2次世界大戦中の1944年、オリバー・レイザーとラロードウェン・デービスというカナダの2人の社会学者が書物の中で初めて使いました。つまりシエークスピアの時代の英語ではないのです。「グローバル」は地球などの球体概念だと言えます。

ではグローバル化は実際にいつごろから始まったのでしょうか。91年に東西冷

国際教養大(秋田市)

中嶋嶺雄 理事長・学長



なかじま・みねお 1936年長野県松本市生まれ。1960年文学士(東京外国語大学<中国科>)1965年国際学修士(東京大学)、1977年東京外国語大学教授、1995~2001年東京外国語大学学長、1998~2006年アジア太平洋大学交流機構初代国際事務総長、2001~2007年文部科学省中央教育審議会委員、2006~2008年内閣教育再生会議有識者委員。パリ政治学院・カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院などの客員教授を歴任。著書は『現代中国論』『中ソ対立と現代』『北京烈烈』(サントリー学芸賞受賞)など多数。中国・台湾などについての評論活動で2003年度「正論大賞」受賞。

## 「グローバル化と日本の大学」

また、04年に国公立大学を法人化するまで、日本の国公立大では非公務員である外国人が学長にも学部長にも学部長にもなれませんでした。グローバル化どころか「知の鎖国」です。大学の内部がグローバル化に対応できる体制に変われるかどうかも課題なのです。

### アップル成功の理由は

「知の鎖国」という状況の中で、私どもはグローバル社会を想定した「国際教養」という概念を打ち立てました。アップル社を設立した故ステイブ・ジョブズ氏が「テクノロジーとリベラルアーツ(教養)の交差点」という良い言葉を残しています。「科学技術の先端をいけばいくほど」リベラ

### 秋入学で留学しやすく

ななアーツ、または「自由な学問で」言っても良いし、「教養教育」と言っても良いが、それが重要だということもいつも考えてきたからアップルは成功したのだと思います。本学の考え方もまさに同じでした。

秋入学で留学しやすく、留学生在校期間が長いこと、私たちが学生をアメリカに送る時、アメリカまで学生を受験に行かせることはしません。書類審査やTOEFLのスコア、推薦状などを送ってアメリカの大学が審査して合否を決めます。ところが、日本に来る留学生は日本に来て日本で試験を受け、場合によっては日本語で質問されます。こんなに敷居が高いのならば、欧米やアジアの他の大学に行こうということになってしまいます。

### 停滞の20年、大学も逆行

戦が終結し、東欧諸国が民主化し、ソ連が崩壊しました。そして、このころちょうどIT革命が始まりました。急速にコンピュータが普及したのが90年代の初頭です。従ってグローバルイズムというのはこの20年ほどの話なのです。しかし、この間は日本が停滞した20年とも重なり、本来は社会の先頭に立たないといけない大学がグローバル化と対峙する形で、グローバル化を否定するような動きを始めたのです。

### 外国語・教養教育を否定

私が国際教養大の創設にかかわるようになった理由の一つに、アメリカの大学院で体験した学生たちの姿があります。日本の大学院ではゼミで発表して論文を書けば大体、修士号を取りますが、アメリカの大学院生はものすごく勉強し、苦勞を重ねて学位を取得しています。この違いがやがて世界における日本の没落に

つながるのではないかと思っていました。現実にはそうなりつつあります。グローバル化を否定する動きについて具体的に申し上げます。東西冷戦が終結した同じ年に日本では大学設置基準の大綱化が行われ、大学作りが割合楽になりました。一方でカリキュラムが大学に委ねられたために、多くの大学はグローバル化にとって必要な外国語教育と教養教育を否定する方向になり、肝心の学部が空洞化してしまいました。本来は高校の延長ではない本格的な教養教育と外国語の運用能力をきちんと習得させねばならないのに、中学高校大学と10年間英語を勉強しながら英語が使い物にならないまま若者たちが社会に出て行く状況で、グローバル化に対応できませんでしょうか。

さらに、大綱化の直後に大学院の重点化が行われ、重点化はもちろん大事ですが、一方で定員が増えすぎたために、例えば他の大学院に落ちた学生が東大の大学院に受かるというような現象があちこちで起こるようになりました。その典型例が法科大学院です。私がアメリカで感じたような、大学院を本当の意味で充実させるのとは異なった方向で重点化が行われたのです。

一つは秋入学です。留学生はもちろん、日本の高校生も1年間海外でホームステイし、向こうの高校を卒業した後に入学しやすくなります。本学はそうした高校生を対象にした特別選抜もしていますが、非常にいい学生が入ってきています。6月ごろ日本に戻り、8月に受験し9月1日に入学ですから無駄が少ない。私は高校生留学を推奨しているのですが、日本では減っているのが残念です。

最近は大卒の保証が言われていますが、私は情報公開が重要だと考えています。本学では何人受験して、何人合格者を出して、何人入学手続きをして、ということを全部公開しています。定員割れが明らかになるのを恐れて公表を控える大学もありますが、きちんと公開すべきです。本学は学生の満足度調査も細かく実施しています。